

『海の音（うみのね）』

川浪ナミヲ

雄大な空と対をなし、遠く広がる水平線。足元には寄せては返す波打ち際。寄せる波の音、砂浜を静かに引く波の音、ぶつかり合い、くだける波の音、そのゆらぎは私達に穏やかな表情を見せ、癒やしを与える。

「大丈夫だよ。頑張ったね。」

海の音は私達の心を優しく包み込む。

優しさとは裏腹に、時には私達にその憤りを突きつける。荒れ狂う姿を見せる。

厚い灰色の雲と駆け抜ける雨風。そんな景色に同調するように激しく唸る海の音。

「これでいいのか?!こんなもんじゃないだろ?!」

海の音は現実を示し、自然の厳しさを教える。

海は私達に営みを与える。漁船の行き交う港、低空を優雅に舞い水面をついばむ海鳥の声。

船は私達に海の命を届け、暮らしを豊かなものにする。

「さあ召し上げれ。お安い御用だよ。」

海の音はおおらかに私達を支えてくれる。

そして、何にも応じぬ静寂の瑠璃色。まだ見ぬ未開の海、光も届かぬその場所に私達はたどり着く事ができるのだろうか。

「おーい！俺はここにいろよ！俺どうしたらいい？」

「…」

海は何も答えない。ただ静寂の時を与える。宇宙にも似た壮大で崇高なその姿で。

地球の歴史は原始の海から始まった。生命の源であり、畏怖の対象であり、帰るべき故郷のような場所。海の音は私達の祖先の声、家族の声、仲間の声だ。その声に耳を傾け、導かれ、そしていたわりの心を持ち、共に歩んでいかねばならない。

「これからよろしく。いつも一緒だよ。」